

本興寺だより

令和六年
十二月
第二六四号

「日月の光明の 能く諸の幽冥を除くが如く 斯の 人世間に行じて 能く衆生の闇を滅す・・・」

（法華経 如來神力品第二十一）

師走に入り、今年も残すところ一月となりました。元日の能登沖の大地震から昨今まで、地震の余波が続いています。

大自然の脅威に、人間の力の虚しさとか小ささを感じさせられます。被災者の方にしてみれば、人生を踏みにじられた悲しさとやり場のない苦しみがあるとあります。それでも立ち止まらず、前を見て進まなければならぬ現実があります。

人類は自然界の征服者ではなく、災害があってもなくても、大自然と調和して、お互いに助け合って生きなければならぬ現状を見せられている気がします。

人間は大自然の恵みがないと生きていけないのも事実です。「ワパニシヤツド」という、紀元前七世紀に遡る（日本では弥生時代頃）古代インドで著された哲学・宗教書にもすでに、宇宙の根源、人間の本质について考察がされています。その中で「神は鉱物の中で眠り、植物の中で目覚め、動物の中で動き、人間の中で考える」とあります。万障



のあらゆる物に神が宿っているのであり、その現れ方が違っているだけなのだ。文明がほとんどない原始の時代故に、神性が研ぎ澄まされ、人の心が自然界の万物に宿る神の靈性と感応することを肌で感じ、神の存在を確信できたのではないだろうか。

文明が発達し、豊かになるほど、人は心の感応（本来持っている靈性）が失われていると仏様は云われます。

奥能登に現在まで伝わる「あえのこと神事」は、十二月五日に、一年の収穫を終えた田んぼから、夫婦神である田の神様を迎え、ごちそうでもてなしをします。厳しい冬を家族と一緒に過ごされ、翌春の二月九日に田へ送ります。稲作を守る田の神様に祈り、感謝する代表的な民族行事で、国の重要無形民俗文化財に、また世界無形遺産に登録されています。

これらは単なる過去からの風物詩の遺産としてのみ捉える人も多いですが、そうではないのです。万物に対する敬虔な祈りと感謝の気持ちの中に、ご神仏のご加護が垂れるのだと云われています。日本には昔から森羅万象には八百万（やおよろず）の神が宿っていると云われます。年中行事は、神と仏と人との関係を見つめ、感謝し、生き方をより良く正していく機会でもあるのです。

師走は、歳末助け合い運動もあり、一年の感謝を込めて贈るお歳暮。悪事をいさめ、災いを祓いにや

って来る秋田県の来訪の神「なまはげ」等の行事。年越しを迎える大掃除。注連縄（しめなわ）や鏡餅など年神様を迎える正月飾りの準備など。そこには、一年を振り返り、自分の生きてきた足跡を見つめ、心を取り直して、目には見えなくても、ご神仏と先祖の御霊の存在を信じ、共に今を生きているという感謝と反省の気持ちをもって、新たな年に向かうための一年の総決算の月です。

人間の心身を悩ませる煩惱は一〇八種あると仏様は説かれています。大晦日の除夜の鐘は、これらの煩惱を除いて心身共に清浄になつて新年を迎えるために一〇八回つづのです。

仏様は初めに「四諦」の教えを説かれ、苦悩を離れる道を示されました。

- 一 『苦諦』（迷いのこの世は一切が苦につながる）
 - 二 『集諦』（苦の原因は求めて飽かない妄執から）
 - 三 『滅諦』（執着を断ち、苦の原因を滅した境地）
 - 四 『道諦』（悟りに導く八つの正しい道の実践）です。
- 「諦」とは、望みを捨ててあきらめることではなく、物事の真実の姿を「明らかに知る」ということで、「明らかにする」という意味です。「苦」とは、単に苦しいことが多いということだけではなく、思い通りにいかないことなのです。

私達は、「気が付いたら自分が生まれていた。人生は幸せであるべきなのに、何故に苦悩が起るのか？」と考えがちですが、思い通りいかないのが人生の真相です。



三国志には、「石徳林」という別名「寒貧」（漢字表記で「素寒貧（すかんびん）」）という人の話があります。もともと学者ですが、意図的に人目を避けて何も持たず、乞食のような隠遁生活を選んだ人です。貧しくて身に何も持たない人を「すかんびん」というのはこの人の名に由来しています。③この人は、①人を慈しむ ②何も持たぬ暮らし ③人の先に立たぬ人生を生きる指針を友に語り、友は、「志は千里にあり、年老いてもその高い志を生涯つらぬけ」と言つて見送つたそうです。

どういう境遇にいても、その中で幸せ、心の平安を見つけることはできるのです。

人の悩みは、主に自身、家族の問題と人間関係に分けられます。また個別的には、個人の願ひ、病氣、経済的なもの等に分かれます。冒頭の文のように、如何なる悩みが己の心に暗く、闇のように覆つていても、夜が必ず明けて朝がくるように、また夜の時であつても月の明かりが射しているように、神仏からの解決の光が注がれていることに気付きなさいと教えています。

多くの災難を通して、今年は何々と助け合う大切さ、支え合い、思いやる尊さを、改めて考えさせられた年でした。逆境にあつても、その中で自ら日月のごとき光を、心に灯し続けることが大事であると説かれています。本年も有り難うございました。